

「大山検定」に チャレンジしませんか

大山開山1300年を迎えるにあたり、大山の自然や歴史、文化のすばらしさを町民の皆さんに再認識してもらえる機会として「大山検定」を企画しました。

検定は、町内小学校では1学期に初級・中級・上級の3段階で各校で実施し、中学校では1学期に「マスター」のコースを実施し、合格者に「認定バッジ」を贈呈します。

一般の検定は秋ごろの予定で、実施日は広報8月号でお知らせします。検定では、大山にまつわる事柄から設問しますが、小学校では難易度を3段階にわけて、中学校と一般の方には幅広く出題する予定です。

教育委員会では、小中学校における「ふるさと学習」の充実、一般の方には各公民館で実施する「大山学講座」や図書館の「大山」に関連する書籍等の紹介などに取り組み、大山検定を受けられる方に役立てていただくとうとさまざまな事業を計画しています。

◆問い合わせ先

人権・社会教育課 文化財室

☎0859・54・5212

まちのたから (39) 文化財室通信

シリーズ 「日本遺産」 第13話

今回は、第3章の締めくくりとして、大山と四角山王、大山道のいろいろな側面について紹介します。

大山を守る四角山王と「聖域」

『大山寺縁起』によると、兜率とせつてん天から下りてきた智勝仙人が十一面観音・虚空蔵菩薩・不動明王・毘沙門天を安置したところ、これらが仏敵を防ぐ誓いをたてたこと、そしてこれが今の『木ノ目』『岩ノ目』『刃』『石』と呼ばれる四角山王であると書かれています。さらに、権現のご利益と山王の垂迹を尊び敬つてこの山を「大神山」と名付けた、とあります。この四角山王は仏敵を防ぐ誓いをたてている点からも、山王が置かれた範囲は大山の「聖域」と捉えられます。

では、山王はどこに置かれたのでしょうか。『大山寺本院西楽院要用雑録』には、山王の在所は西明口、汗入道、河床（川床）の東、本社の傍の四か所であると書かれています。江戸時代後期の堀田里席作『伯州大山略絵図』には、川床道に「動石山王」、坊領道に「鋸ノ目山王」、横手道に「木

目山王」の文字が読み取れます。また、明治3年の雲城作『大山寺領絵図』には、「山王」という表記が三か所、一つは横手道入口の石の大鳥居の近く、一つは坊領道沿いで尾高道との分れと種原との間のあたり、一つは赤松の近くに描かれています。

木ノ目山王は大神山神社石の大鳥居の傍、鋸ノ目山王は籠立橋の2キロ上にある鍵掛かぎかけさんが絵図・資料と共に一致します。川床道には、動石山王が比定されますが、諸説あります。残る山王（岩の目山王）については、明治の絵図には赤松付近に、『要用雑録』には「本社の傍」とあり、詳しくは分からないのが現状です。

廻国行者かいこくぎやうじやとついでに「大山道」

大山道は、どんな人が行き交っていたのでしょうか。

江戸時代中期、日本六十六ヶ所の著名な寺社に法華経を書写して奉納巡拝する行者（廻国行者）が急増したと伝わります。大山寺は、伯耆国の納経所の一つになっていたため、全国の廻国行者たちが大山道を通っ



▲坊領道沿いの鋸ノ目山王 (通称で「カギカケさん」と呼ばれた)

て納経に訪れました。

宮内の仁王堂公園内には「廻国一千人供養塔」が昔とほぼ変わらぬ位置に建っています。当時は、廻国行者を泊めたり支援することでも、ご利益を得られると信じられていました。大山寺へ納経に訪れた廻国行者の接待が一千人に達したのを記念して宮内村の斎藤与左衛門が造立したものと伝わります。

また、かつて大山寺には三軒の豆腐屋がありました。中門院は上豆腐屋、南光院は下豆腐屋、西明院は西明豆腐屋を営み、この豆腐屋は参詣した行者などを泊める宿でもありました。現在とやま旅館敷地になっている場所は上豆腐屋跡地で、参道沿いに明和9（1772）年に建てられた「回国行者三千人宿施行塔」が残されており、大山寺に廻国行者が多く訪れていたことを物語っています。（人権・社会教育課 文化財室）